

現代的青年期と共同学習の課題 ——青年団による青年問題研究集会の現状と課題——

小林平造

(1992年10月15日 受理)

The Present-day Adolescence and the Problem for the Cooperative Learning in the *Seinendan* (popular organization of the youth in Japan)

Heizo KOBAYASHI

序章

戦後わが国に成立した社会教育法制は、国民の自己教育活動に社会教育の本質があるとし、国民による民主的、主体的な自己教育活動を奨励し、社会教育施設を設置し、環境を醸成していくことに社会教育行政の課題があることを示した(教育基本法第7条、社会教育法第3条ほか)。国民による自己教育活動がいかなる内実をもって展開されていくかは、戦後の社会教育の内実とその価値を決める中心的な位置を占めることになったのである。戦前・戦時下において翼賛体制にくみし、教化主義の社会教育活動に専念した諸社会教育団体は戦後新たな歩みを始めた。青年団も戦後初期に各地で再結成され、翼賛体制にくみした反省から青年団自主化運動を展開し、民主的な青年団組織として地域組織を基盤として全国組織を再結成した。その青年団運動にとって、1950年代に青年学級振興法成立時にこれを深く吟味するなかで生み出した日本青年団協議会(以下、「日青協」)の「勤労青年教育基本要綱」と共同学習論は、社会教育の基本理念と学習方法として確立し、広く社会教育分野に影響を与えるものとなった。青年団における共同学習の場は、青年問題研究集会(以下、「青研集会」)である。これは、各地の単位青年団での青研集会を基盤として、市町村、道府県、全国の各段階で組織的にとりくまれてきた。青研集会は青年自身の自己成長の場として、また青年団運動の共通の課題を明らかにし、運動の方向を明らかにしていく場として、青年団運動に欠かせぬとりくみとなってきたのである。

しかし、戦後40数年を経た今日、青年団の弱体化傾向と共に、青年団の共同学習、青研集会も多くの問題をかかえることとなった。その現実のなかで大切な点は、青年団運動の弱体化が共同学習、

青研集会の弱体化の本質的原因ではないということである。原因は別のところにある。どの時代においても青年にとっては自立を見通す学習、青年の課題を見つめ、これを解決する筋道を明らかにする学習は欠かせぬものである。したがって、青年による今日的な共同学習論を新たに創造していくことは、勤労青年にとって切実な課題となっているとみなくてはならない。さらには、新たな共同学習論の創造は、青年団運動の学習理論と方法の改革を通して青年団運動の現実を好転させていく大きな土台ともなるものである。

本小論は、青年団運動における共同学習衰退の主な原因を、現代社会の変貌、そして青年の意識と生活実態の大幅な変貌にあると捉え、とりわけ現代的青年期の特徴を吟味し、新たな共同学習、青研集会づくりの実践的な筋道を明らかにしていくことを意図するものである。また、特に地域や道府県、そして中央（日青協）で行われる青研集会を検討の対照に置いて吟味していくことに力点を置いている。青年団における新たな共同学習論の実践的な筋道を明らかにする吟味のためには、これとは別に青年団のリーダー養成のとりくみの実践分析が必要である。今日の青年を前にして、本格的なリーダー養成のための実践が日青協や道府県段階で展開され出している。それらは、日青協の清溪塾や鹿児島県のアクティブセミナー、沖縄県の明倫塾などを典型事例とするものである。これは、長い時間をかけて青年たちと指導者が向き合い、じっくりと共通の課題、個別の課題を明らかにし、その社会的背景をふまえて、共同学習を成立させているものである。ここでのとりくみは重要であり、今日的な共同学習論と実践づくりの筋道に大きな役割を持つと思われるが、ここではその指摘のみに留めておくことにしたい。

青年団の青研集会に参加してくる青年とは、主に高校卒業を最終学歴としている青年である。近年、大学や専修学校の卒業者も少なからずみられるようになったが、そうした層は多くないことも指摘しておこう。後に学校教育問題を数カ所指摘するが、その際は主に高校教育までを指しているのである。

また小論は、日青協助言者としてのアクションリサーチを土台としており、実践的体験をもとに分析したものである。そしてこれまでの実践をふまえて実践課題を析出していくことを意図したものである。その意味ではここでの論議は後の実践をふまえて検証していくという性格も持つものであり、あくまでも研究ノートとしての小論であることを確認しておきたい。

この小論に直接関わる筆者の論考としては、「共同学習の現代化」(鹿児島県社会教育学会『社会教育研究年報』第4号1988年6月)、「共同学習の現代化(2)」(同第6号1990年8月)、「共同学習の現代化(3)」(同7号1991年8月)などがある。

I. 青年問題研究集会の現状と今日的意義

1. 問題の所在

青年団運動においては、「青研は青年団運動のバックボーン」と言われ続けてきた。しかし今日、

青研集会の現実をみると、こうした位置づけにふさわしいだけの実態を伴っていないことを指摘せざるをえない。それは、日常的な共同学習が各地の地域青年団によって十全にとりくまれていないこと、特に市町村における青年団組織で青研集会がとりくまれなくなっていること、多くの県団組織で本来の青研集会らしいとりくみができなくなっていること、全国青研でも、分科会の内容が共同学習の全国的集約点としてふさわしいだけのものになっていないこと等々に現れてきている。

しかし青年団にとって、共同学習の場としての青研集会は充実・発展させなければならないものと自覚されてきた。その立て直しには少なからぬ困難な課題を伴うが、青研集会の充実・発展は青年団運動の発展にとって欠かせぬ課題だからである。そこで、今なぜ青研集会の充実・発展を問うのかについて、問題となっている諸側面をとらえ、以下に示すように、その本質的問題と現状にみる具体的問題の二側面から吟味し論じていくこととする。

問題の核心部分は、現代的青年期の質（現代青年像）をどうとらえ、今を生きる青年がとりくむ青研集会の在り方をどう構想するかにある。第1に、青年団運動の意義、とりわけ現代的青年期を生きる青年にとっての青年団運動の意義について吟味する。第2に、共同学習と青研集会の意義、とりわけ今を生きる青年にとっての共同学習と青研集会の意義について吟味する。そのうえで、青年（いうまでもなく、現代的青年期を生きる青年である）がとりくむ青年団運動の質に規定されている青年団運動と共同学習、青研集会の諸問題について、3つの視点から、その質の問題を吟味する。

さらに、問題をかかえる青研集会の具体的な現実を把握していくこととする。ここでは、各段階の青研集会の現状、レポート作成における問題点、青研集会にたいする推進体制と指導・援助の問題、特に、市町村青研の問題など、青研集会の現状の具体的課題を吟味する。

2. 青年団運動に欠かせぬ青研集会

1) 現代的青年期と青年団運動

青年団運動は、その時々歴史的な社会状況のもとで生まれてくる青年の固有の課題に対して青年集団が主体的にとりくみ、課題解決を具体化していくことに一つの意義がある。その固有の課題とは、青年の労働条件や社会的地位の改善を求めるものなど、政治的、社会的に鋭く問題が問われるものもあろう。また、平和運動や領土の問題などもあろう。青年が生きる地域づくりや生活の問題、文化にかかわる問題もある。そして余暇生活やスポーツ・レクリエーションの問題など様々である。さらには、そうしたとりくみや日常の青年どうしの交わりのなかですすめられる青年の自己教育を通じた自己形成を具体化していくことにあと一つの意義がある。時代を生きる青年の固有の課題を解決していくとりくみと同時に青年自身が自己形成を遂げていくというところに青年団運動の意義が確認されるのである。そして、他の青年運動に比してその固有性は次の諸点にある。まず、それが地域青年団運動としての特質を有し、「地域づくり」を柱とし地域での自由な生活時間のなかで青年活動を創造してきたことである。次に、社会的には平和運動や沖縄返還運動、北方領土問

題などにとりくみ、各地に網羅的に存在する伝統的青年組織であることである。さらには、わが国の大衆的青年団体としては最大規模を有していることなどである。

200万人を越える構成メンバーを有した1950年代に対して、それ以後は人口、とりわけ青年人口の都市集中と社会の都市化のなかで団員数も徐々に減少し、農業青年中心の活動形態にも変化がみられた。今日、青年団を構成する青年はその多くが賃労働者であり、共同学習や青研集会在が生まれて、定着していった時代とくらべると大きく変化している。とりわけ、日本社会における青年像の変化が指摘されだした1970年代、そして「新人類」などといわれさらに青年像が変質していった今日の時代にあっては、青年がかかえる課題にも大きな変化が生まれてきたといわざるをえない問題がある。その詳細にふれることはしないが、ここで注目しておきたいのは、現代的青年期を生きる青年にとっての課題についてである。

いうまでもなくアイデンティティ（注1）の確立は青年期の心理社会的発達課題である。しかし、現代的青年期にあっては「アイデンティティ拡散」（注2）問題が青年期の困難な課題として横たわっている。それは、現代的青年期の自立（注3）にとって大きな課題を付与してきたと言わざるをえない。青年団に即していえば、青年団運動の重要な意義として確認される青年の自己形成の課題にとって、のびきならない問題が出てきているということなのである。現代的青年期にみるアイデンティティ拡散の危機は、青年社会学や青年心理学分野で1970年代後半から80年代前半の時期にしきりと問題指摘された課題である。したがって、すでに大きな社会的課題として認知されてきていることはいうまでもないことであろう。1984年の世界青年意識調査結果で指摘された青年の「自己中心主義、消極主義、社会的無関心」、「個」にとじこもる青年像の指摘などもこのことと無関係ではない。「青年が他者への配慮に欠ける」とか、「自分のことだけで精一杯だ」などという指摘、「地域や社会の課題にとりくんでいこうとする青年の姿勢がみられなくなった」などという指摘もこうしたことと無関係ではない。アイデンティティの確立にとっては自己と他者との相互関係の深まりが不可欠である。にもかかわらず、今日の青年は自己のリアルな課題を他者と共有していくことができずにいる。「個」にとじこもり、自己の本当の問題を出していくことのなかで他者との関係を築き上げていくことができないのである。今日の社会にあっては、閉ざされた「個」のなかにある自己の課題こそ、実は青年が共にみつめあい解決を図っていかなければならないことが多いのである。

大きな社会問題化した青年問題の核心はアイデンティティ拡散問題にある。そして、この課題解決へのとりくみは青年団運動はもちろん青年運動の固有で欠かせぬ課題の一つとして位置づくものなのである。同時に、青年団運動にとりくむ現代的青年期を生きる青年自身の自己形成にとっては、このアイデンティティ拡散の克服が不可欠の課題として横たわっているのである。さらには、共同学習を成立させていくために自分自身がとらえている課題の分かちあいにとって、閉ざされた「個」の打ち破りは大きな課題として存在していることを指摘しておきたい。もちろん、青年の意識と生活実態の吟味を背景として把握される青年像の問題はこれだけにつきるものではない。特に、

現代社会における青年の生活にみる消費主義の傾向を生み出す社会背景の問題や青年をめぐる教育の現実、そして青年の労働実態をめぐる諸問題など青年像を規定している背景の問題についても吟味していく必要があるが、筆者はすでに別の小論で若干の分析を試みているのでここではその指摘のみに留めたい（注4）。

では、青年団運動はこのアイデンティティ拡散の克服にとってどのような可能性を有しているか。それは、自由意志に基づいて参加してきた青年集団であること、集団による共同の実践をとりくんでいること、そしてそれぞれのとりくみは各々の青年の主体性が発揮されるなかですすめられること、この三点において現代的青年期を生きる青年にアイデンティティの確立をすすめる契機を保障しているのである。注1、注2に示したように、「不信」、「孤立」、「甘え」を三要素としたアイデンティティ拡散の方向はその三点に保障される契機によって、「信頼」、「連帯」、「自立」を三要素とするアイデンティティ統合の方向へとすすむことになるのである。明らかに青年団運動は現代的青年期のアイデンティティ拡散の危機を救う力を持っているといえるのである。

しかし、ここに示したアイデンティティ確立をすすめる契機となる三点は、契機として存在しているにすぎない。アイデンティティ統合を保障する契機となるか否かは、一重に青年団運動の質の問題にかかっているのである。そこに、閉ざされた「個」の問題が横たわっている。共同学習が成立しない、青研レポートがリアルで本質的な問題をとらえていない、青研での論議が深まらないという問題状況は、そのことに大きくかかっている。他者への「不信」感、集団からの「孤立」感、他者や社会への「甘え」は、アイデンティティ拡散の三要素であるが、現実的には、青年団活動の中でそうした実感を味わい、「しらけ気分」にひたっている青年団員は少なくないであろう。青年団活動を通じての自身の成長や課題を深くとらえかえしていく場が青研集会であるならば、共同学習や青研集会を通じての語りあいが、そうした青年自身の現状の課題を自覚させ、問題の解決を保障する内実を持たなくてはならないのである。

2) 今を生きる青年の青研集会

戦後の自主的・主体的な日本の青年団運動が生み出してきた共同学習論とこれを具体化していく重要な機会としての青年問題研究集会とは、青年団運動にとって欠かせぬ学習論として定着し、青年団運動の内実を豊かにし、これを発展させるための重要な活動として定着してきた。

共同学習に基づいた青研集会は、青年団活動にとりくむ青年自身の成長や課題を明らかにし、青年団運動の現状と課題、地域や社会の青年の課題やとりくむべき課題を明らかにしていく場として、実践と学習を統一していく青年団固有の学習の場として発展してきた。青年団がとりくんできた諸活動をじっくりとみつめ、相互にとりくみの様子を語り合い、そこに明らかとなる共通の課題を見出ししていくこと。実践の事実に基づいて、これを青年自身が自らの頭で考え、共同の努力を通じて問題点や共通の課題をつかみ出していくこと。そうした作業を通して、青年一人ひとりが自己を見つめ、地域や社会の現実を深く見つめ、互いの成長の内実や成長の課題を明らかにしていくこと。

共同学習論を土台とする青研集会とは、互いがまとめたレポートを使いながら、こうした論議を深めていくことにその本質がある。

しかし、今、こうした論議が十全に展開され、充実した青研集会が展開されているとは言い難い現状がある。もちろん総てがそうだとは言えない。青研集会の基本を大切にして豊かな内容の集会を展開している事例は存在しているが、総体的にみられる現状は多くの問題をかかえている。そこには、地域において青年団がとりくむべき課題が何であるのか、現代社会における青年団の目的や存在意義が地域の青年団員一人ひとりにみえていないという問題もあろう。さらに深刻なのは、青年団のとりくむ活動が団員一人ひとりにとってどのような意味を持つものなのであるのかがみえていない問題があることである。それこそ青研集会で共同の努力で明らかにされなくてはならないことがらなのだといえよう。青年団員一人ひとりの自己形成における課題把握が曖昧である。そして、青年団活動を通じてどのように自分と仲間たちが成長していったのかということがらについて意図的な把握がなされないままに日々の活動が展開されている。したがって、青年団運動にとりくむ青年団員一人ひとりの課題を解決し、成長を互いに保障しあっていくということや、青年団運動がとりくむ青年や地域の諸課題が何であり、その現状と課題が何であるのかということがらについての意図的追求はなされないままに日々の諸活動が展開していることが少なくないのである。

さらには、すでに指摘した今日の青年のアイデンティティ拡散の問題を検討していけば、青研集会の場が現代的青年期を生きる青年にとって重要な学習の場となりうるものが充分確認されなければならない。今日の青年にとっては、自己を深くみつめ、地域と社会の現実を深く見つめていくという作業を、自分自身の体験や実践を通じて行っていくことが大切である。それは、自己疎外を進める社会状況のなかにあつて、彼らの存在証明をあらためて確認させ、アイデンティティの確立をすすめていくうえでの大切な機会となるであろう。また、青年が仲間と共にすすめる実践の意味を振り返っていくことで、自己と他者とのかけがえのない関わりを実感し、青年集団によるとりくみの意味を深く洞察していく機会になっているという点も、今日の社会のなかにあつては重要な意味を持つものとなっているのである。

しかし今、青研集会はその質、量ともに本来の意義を十全に持ちえないという現実に直面している。それは、現状の青年団運動の質を反映してのことといえるが、青年団運動を発展させていくための重要な問題としてとらえておかなければならない。そこで次には、以上の指摘についてさらに検討を深めていくこととしたい。

3) 青研集会の諸問題

第一に、確かに今、青年団運動も青研集会も少なからぬ問題点をかかえていることは事実である。しかし諸実践は着実に積み重ねられていることもまた事実である。青研集会では報告のレポートは貧弱でも、とりくみについての「おしゃべり」(自覚的に構成した語りではなく、思いつき的にあれこれと語る内容の語り)は活発になされることが少なくない。司会者や助言者のリードで実践や

